

## 全国大会出場者の壮行式で

### 選手を激励

平成二十八年七月二十日、母校体育館に於いて、学校主催による前期の全国大会へ出場する選手の壮行式が行われ、同窓会本部より幸地会長他役員が参列しました。

中國校長先生より次のような激励の言葉が述べられました。

今日は全国大会と県予選の激励ということでお話しします。

近藤薫さんという方の音楽の話をします。東京フィルハーモニー交響楽団のバイオリニストで西日本新聞の文化欄に「金のオタマジャクシ」というエッセイの中に面白い話がありましたのでこの話をして激励の言葉に代えさせていただきます。

『ステージ上での緊張というのは、僕ら音楽家にとって、すごくやっかいなものだ。手足なんかガクガク、ブルブル、しょっちゅう震えて、演奏に支障をきたすこともしばしば。「ガクブル病」なんて言われる、恐怖の瞬間だ。

これは何も小心者という話ではない。「こう弾きたい、こう弾くんだ」という強い気持ちを持って自分自身を追い込むこと

で、緊張という副作用が生まれるのだ。手を抜いたことはないが、おそらく適当に演奏していれば、緊張なんてしないだろう」という風を書いてありました。

たぶん君たちも今まで一生懸命にやってきたからこそ、今の君たちがあって選手になったり、パソコンの前に座ったり、机についたり、一生懸命だからこそ緊張してるんです。

文章の続きです。『ピアニストのホロヴィッツは自分の弟子が本番前にナーバスになっているのを見て、「君にしかできない失敗をしてきたまえ。それが君なんだ」と送り出した。弟子は良い意味で吹っ切れて、素晴らしい成功をおさめた。お師匠の一言は大きい。僕も「近藤君、緊張しないようじゃダメだ」と言われたことがある。』緊張とは誰でも、そしてそれはあたり前て緊張しないとダメなんですな。

今日のひと言はこれです「緊張しないようじゃダメ」  
続きにこんな話もありました。

『ある時、僕は「タイスの瞑想曲」というのを弾いた。娼婦タイスが自分の半生を悔い改め、新しい人生を歩むために祈るこの曲の最後、天に届ける究極の弱音で、弓がパタパタ震えた。失敗したな、と思ったが、終演後にお客さんが、「あの震えが